

Redburn における父と子

藤 江 啓 子

1839年6月3日、Herman Melville は貨物船セント・ローレンス号に見習い水夫 (“a boy”) として乗船する契約を交わし、同年6月5日には、ニューヨークよりイギリスのリバプールへ向けて出航した。再びニューヨークへ戻ってきたのは約4カ月後の10月1日であった。Melville 20歳の時のことである。この時の体験をもとに創作されたのが *Redburn* であり、10年後の1949年に出版されている。実際この小説には自伝的要素が多く含まれている。裕福な紳士階級の出で貿易商を営んでいた父が破産の後、死亡したため貧しい一家から経済的自立を計ってリバプール行きの商船に乗り込むという物語の設定は当時の Herman の状況と同じであるし、「ニューヨークからハドソン川沿いの快い村へ引っ越した」¹⁾と描かれる Redburn の母についても Herman の母同様である。病弱ながらも弟のことを親身になって心配し助言を与えてくれる兄の存在も同じであれば、「バンカーズ・ヒルで女王の祖先と戦った祖父」(p. 125) はボストン茶会事件に参加しバンカーズ・ヒルで戦った Herman の父方の祖父、Major Thomas Melville への言及であると考えられる。またハイランダー号上の幾人かの乗組員も実在の人物に基づいているとされている。²⁾ Herman Melville 自身、この小説が個人的体験と観察に基づいた率直な物語であることをイギリスの出版社 Richard Bentley に次のような手紙を書き送ることによって認めている。

I have now in preparation a thing of a widely different cast from “Mardi”: —a plain, straightforward, amusing narrative of personal

experience—the son of a gentleman on his first voyage to sea as a sailor—no metaphysics, no conic-sections, nothing but cakes & ale. I have shifted my ground from the South Seas to a different quarter of the globe—nearer home—and what I write I have almost wholly picked up by my own observations under comical circumstances.
(1849年7月)

Melville 研究の第一人者である Hershel Parker も小説の前半部分、すなわちリバプール到着までのほとんどの章がかなり綿密に 1939 年の体験に基づいて描かれていることを指摘し、1920 年の Melville 再評価以後 30 年間は伝記的解釈が主流であったと述べている。³⁾ この伝記的解釈傾向の流れを変えたのが、1951 年の William H. Gilman の *Melville's Early Life and Redburn* である。Gilman はこの作品は「ロマンスの要素を持った自伝」(“autobiography with elements of romance”)と呼ぶよりも「自伝の要素を持ったロマンス」(“romance with elements of autobiography”)と呼ぶのが適切であると述べている。⁴⁾ 事実に基づいた旅行記というよりはむしろ芸術的価値を備えた一つの文学作品として捉えようというのであろうか。なるほど作品は実際の航海よりも 10 年という長い年月を経た後に執筆され、また Melville にとって最初の航海を素材としながらも、*Typee*, *Omoo*, *Mardi* という 3 つの海洋小説出版の後、4 番目の作品として出版されている。30 歳になった Melville が 10 年前の航海を振り返り、何らかの意味づけをした作品と捉える方が適切であろうか。R. W. B. Lewis は、父の死を最も重要な出来事として捉え、主人公が自分は孤児であることを実感する年代を若い Herman Melville が実際にリバプールを訪れた 1939 年におくべきでなく、その 10 年後、つまり、彼が *Redburn* を執筆しながらリバプール旅行の意味づけをしていた年におくべきであるとして次のように述べている。

We ought to locate the moment [when Melville's hero realizes that he is an orphan] chronologically not in 1839, when young Herman Melville actually did visit Liverpool, but ten years later, when he was investing that visit with meaning in the writing of *Redburn*.⁵⁾

Herman Melville の父 Allan Melville が破産したのが 1830 年の夏、そのため発狂し死亡したのが 1832 年 1 月のことである。この父の死が主観的要素として作品の中に入り込んでいると R. W. B. Lewis は次のように続ける。

... and the “subjective”—the bubbling-up of whatever Melville had suffered during those dreadful weeks in 1831 when his bankrupt father went mad and died, leaving behind (abandoning, deserting, as it must have seemed to the bewildered child) a lost, helpless, poverty-stricken family. These were the elements and the perceptions which took the form of a growing resentment in Melville: something which only just begins to get into the writing of *Redburn*, but which had, as Auden puts it, to “blow itself quite out” in the books that followed.⁶⁾

Cleanth Brooks も Melville の執筆活動に最も影響を与えた伝記的事実が父の死であることを指摘し、*Redburn* その他の作品の主要テーマとなっていると次のように述べている。

Certainly, one of the major themes of Melville’s fiction is the child’s search for his father—most prominently in *Moby-Dick* (“Where is the foundling father hidden?” muses Ishmael), but also in *Redburn*, and more obscurely in *Billy Budd*.⁷⁾

R. W. B. Lewis は *Redburn* の中で脈動しているものがあるとすれば、それは死者としての父の姿であると述べている。

But if there is something more astir in the novel, it derives from another dead figure: *Redburn*’s father—not from his presence but from the acknowledgment of his absence.⁸⁾

Redburn 執筆において最も重要な伝記的事実は 1839 年のリバプールへの航海というよりはむしろそれ以前の父の死であると言えるのである。本稿ではそうした認識に立ち、父の存在と不在、そして父と子の関係がいかに関作品において意味づけられているかを見ていきたい。

作品の冒頭より父は *Redburn* の外国に対するロマンティシズム、とりわけヨーロッパとヨーロッパ的価値へのあこがれと関係づけられている。主人公 *Redburn* が水夫として海に出ようと思った理由は、経済的な必要に迫られただ

けでなく、次に引用するように外国に対するロマンティズムである。

Sad disappointments in several plans which I had sketched for my future life; the necessity of doing something for myself, united to a naturally roving disposition, had now conspired within me, to send me to sea as a sailor. (p. 3)

そしてニューヨーク新聞の海事広告欄を見て “a strange, romantic charm” (p. 3) を感じると共に思い出されるのが、父と共に埠頭に立って見た船のことである。

I remembered standing with my father on the wharf when a large ship was getting under way, and rounding the head of the pier. I remembered the *yo heave ho!* of the sailors, as they just showed their woolen caps above the high bulwarks. I remembered how I thought of their crossing the great ocean; and that that very ship, and those very sailors, so near to me then, would after a time be actually in Europe. (pp. 4-5)

父は商用で何度も大西洋を渡ったことのあるブロード・ストリートの輸入業者であった。その父が語ってくれる海の話や「ル・アーブル港やリバプールについて、ロンドンの聖ポールの大聖堂に参拝した」(p. 5)話は今も思い出され、父の死後も外国へのロマンティズムはつのも一方である。

In course of time, my thoughts became more and more prone to dwell upon foreign things; and in a thousand ways I sought to gratify my tastes. We had several pieces of furniture in the house, which had been brought from Europe. These I examined again and again, wondering where the wood grew; whether the workmen who made them still survived, and what they could be doing with themselves now. (p. 6)

外国、とりわけヨーロッパへのあこがれは父のイメージと重なり、父のようになりたいという思いはますますつのる。偉大な航海者になって、父が夕食後ワインを飲みながら見知らぬ紳士たちをもてなしていたように自分も「熱心な聞き手に向かって自分の冒険を語る」(p. 7)ことを夢見、また父のようにフランス語を話したいと思う。

And there was a copy of D'Alembert in French, and I wondered what

a great man I would be, if by foreign travel I should ever be able to read straight along without stopping, out of that book, which now was a riddle to every one in the house but my father, whom I so much liked to hear talk French, as he sometimes did to a servant we had. (p. 7)

しかし何よりも Redburn の夢とあこがれを海で切り開くという明確な目的に向けたのは、父がハンブルグから上院議員をしている大伯父への贈り物として持ち帰ったフランス製のガラスの船であった。

But that which perhaps more than any thing else, converted my vague dreamings and longings into a definite purpose of seeking my fortune on the sea, was an old-fashioned glass ship, about eighteen inches long, and of French manufacture, which my father, some thirty years before, had brought home from Hamburgh as a present to a great-uncle of mine: Senator Wellingborough, who had died a member of Congress in the days of the old Constitution, and after whom I had the honor of being named. Upon the decease of the Senator, the ship was returned to the donor. (p. 7)

Redburn の名はこの大伯父にちなんでつけられたものであるが、彼の死によってガラスの船は贈り主に返され、今は Redburn の家にある。ヨーロッパから持ち帰られたこの船は、ヨーロッパ貴族主義を象徴するかのよう「女王」(“La Reine, or The Queen”) (p. 9) と名付けられている。Hershel Parker はガラスの船が「Herman の祖父である Thomas Melville の居間にあったものに似ている」⁹⁾ ことを指摘しているが、作品においては、それが航海や上品さ、そして父に対するロマンチックな夢の象徴となっており、とりわけ Redburn は船の名が示す貴族主義に魅了されていたと John Samson も次のように指摘している。

The symbol of all his romantic dreams of traveling, of gentility, of maturation, and of his father is of course the glass ship. . . . It is no wonder Redburn is so fascinated with the ship, for its name, *La Reine*, testifies to its aristocratic symbolism.¹⁰⁾

そのガラスの船も Redburn が航海から帰った今では、壊れてしまっている。そのさまは次のように描かれている。

We have her yet in the house, but many of her glass spars and ropes are

now sadly shattered and broken, —but I will not have her mended ; and her figure-head, a gallant warrior in a cocked-hat, lies pitching head-foremost down into the trough of a calamitous sea under the bows —but I will not have him put on his legs again, till I get on my own ; for between him and me there is a secret sympathy ; and my sisters tell me, even yet, that he fell from his perch the very day I left home to go to sea on this *my first voyage*. (p. 9)

壊れた船の円材やロープは Redburn のイギリスへの旅行が幻滅に終わったことに対する象徴のようである。彼がイギリス旅行で味わったものは、あこがれていたヨーロッパ的価値の崩壊であると共に、父が死んで不在であるという実感であり、また自分は「紳士の息子」であるという誇りの喪失であった。Sacvan Bercovitch は Redburn が航海に出かけた日に落ちてしまい海のまっただ中に首をつっこみそうになっている船の船首像を父親の姿と同一視し、ガラスの船を「むなしい子としての探求のシンボル」(“Symbol of the vain filial search”)¹¹⁾として捉えている。さらにハイランダー号によるイギリスへの航海を「アメリカの息子」(“American son”)による「ヨーロッパの父」(“European father”)の否定の物語¹²⁾と意味づけている。Redburn がアメリカの息子としていかにアメリカ的価値を自覚したかは後述するとして、まず、とりわけ物語の前半部分において、いかに父のイメージが崩れると共に、父の持つヨーロッパ的価値が崩壊したかをみていきたい。

先に引用したイギリスの出版社 Richard Bentley 宛の手紙に書かれ、また物語の副題 *His First Voyage Being the Sailor-boy Confessions and Reminiscences of the Son-of-a-Gentleman, in the Merchant Service* が示すように、Redburn の父は「紳士」であり、Redburn は「紳士の息子」である。「紳士」の定義は定かでないが、それが貴族主義や世襲制、そして上品さを表すことは確かであろう。Redburn は紳士の息子であることを誇りに思い、アメリカ船ハイランダー号に乗船するが、そこでは紳士性はことごとく否定される。Redburn はハドソン川沿いの小さな村から乗船するためにやってきたニューヨークで、兄の友達 Jones 氏によって、Riga 船長に紹介される。Jones 氏は Redburn の大

伯父が上院議員であり、父はアメリカでは最初の紳士階級の出(“a gentleman of one of the first families in America”) (p. 16) である裕福な商人であったと紹介する。Redburn はこの紹介に得意になるが、Riga 船長には受け入れられない。むしろ甘くみられ、金持ちの親戚がいるのだからという理由で、前金を払ってもらえない羽目に陥ってしまう。そのことについて次のようなコメントがなされている。

And thus, by his ill-advised, but well-meaning hints concerning the respectability of my paternity, and the immense wealth of my relations, did this really honest-hearted but foolish friend of mine, prevent me from getting three dollars in advance, which I greatly needed. (p. 17)

また、乗船後しばらくしてこの Riga 船長を訪問した時に、彼は船上でのヒエラルキーが父権性や世襲制に基づいたものでないことを思い知るのである。最初、彼は Riga 船長は父のような紳士で、彼をなぐさめ励ましてくれるものと思う。

I had thought him a fine, funny gentleman, full of mirth and good humor, and good will to seamen, and one who could not fail to appreciate the difference between me and the rude sailors among whom I was thrown. Indeed, I had made no doubt that he would in some special manner take me under his protection, and prove a kind friend and benefactor to me; as I had heard that some sea-captains are fathers to their crew. . . (p. 67)

そして、「船室に招待してくれて、両親のことや将来の展望について質問し、高名な上院議員の大伯父についての逸話を聞かせてくれ」(p. 67) と言われるのを夢想する。彼は、体を洗い精一杯の身ぎれいな服装をする。いつもの赤いシャツの代わりに白いシャツを着、ズックのズボンの代わりに綿のズボン履き、そして新しいパンプスの靴を履き、猟銃用ジャケットには念入りにブラシをかけ、「上流階級らしい姿」(“genteel figure”) (p. 68) で出かける。ところが水夫が船長を訪問し挨拶するのは船上の習慣ではなく、Redburn は他の水夫からは笑われ、Riga 船長からは怒りを買う始末である。礼儀正しい行いに対して無礼を返す Riga 船長を Redburn はもはや紳士であるとは思わなくなってしまうの

である。(“Yes, Captain Riga, thought I, you are no gentleman, and you know it !”) (p. 71).

彼の船上での最初の仕事は紳士の仕事とはほど遠い豚小屋の掃除であり、Wellington という高名な大伯父にちなんで付けられた名はすぐに敬遠され、“Buttons” (p. 28) というニックネームをもらうことになる。彼のように「白い手をした紳士」(p. 52) が何用水夫になったのかと訊ねられ、また、食事の際に、木切れで食べていると一体どこで作法を学んだのか、「裕福な紳士である父は、紳士である息子にスプーンも買ってやれなかったのか」(p. 55) とからかわれる。2等運転士と友達になろうと、父のべつ甲で出来た古いかぎタバコ入れに入ったタバコを取り出し丁寧に差し出すが、水夫はかぎタバコは吸わないと逆にあざけりにあう。父が航海で上品なフランス語を習得したのに対し、彼は“slush down the main-top mast”(p. 29) といった航海用語を覚えなければならぬ。それら航海用語を知らないため新米水夫 (“Green as grass”) (p. 30) とからかわれてしまうのである。彼の上品でしゃれた服装も海での仕事にはふさわしくない。モールスキンの狩猟用ジャケットは雨に濡れてどんどん縮み、「上流社会の最新流行で作られた」ズボンはあらゆる方向に裂けて「最も優雅さを欠き紳士らしくない」(p. 73) いでたちとなる。家を出る前は日曜日に教会へ行くのに履いていた美しいブーツは、海水のため縮み、索具に上るとひっかかるので、ヒールの部分を切り落としたため靴の底がむき出しになる始末である。

以上のように、父の紳士らしさを受け継いだ「紳士の息子」としての Redburn の紳士性はハイランダー号上において否定されるのである。紳士であることがヨーロッパ的であると断言し難いが、貴族的、世襲的、上流気取り、上品さといった特質や、父がヨーロッパから持ち帰ったガラスの船が象徴するものを考える時、やはりヨーロッパ的と言えるのではないだろうか。また、Pierre の祖父が “an American gentleman”¹³⁾ とわざわざ描かれるのも、当時、紳士といえば本来ヨーロッパ的なものという考えが強かったことを示すものであろう。

往時においてすでに崩れ始めた父の持つ価値は、イギリス到着後、完全に崩

れてしまう。外国に対するロマンティシズムは、最初に目にした陸地、アイルランドが驚くべきものでもなんでもなかったことで一度に吹っ飛んでしまう。

Ireland in sight ! A foreign country actually visible ! I peered hard, but could see nothing but a bluish, cloud-like spot to the northeast. Was that Ireland ? Why, there was nothing remarkable about that ; nothing startling. If *that's* the way a foreign country looks, I might as well have staid at home. (p. 124)

リバプール到着後は、岸辺に立ち並ぶ倉庫がニューヨークのものと同じ様なのに、苦い失望を抱く。

Looking shoreward, I beheld lofty ranges of dingy warehouses, which seemed very deficient in the elements of the marvelous ; and bore a most unexpected resemblance to the ware-houses along South-street in New York. There was nothing strange ; nothing extraordinary about them. . . . To be sure, I did not expect that every house in Liverpool must be a Leaning Tower of Pisa, or a Strasbourg Cathedral ; but yet, these edifices I must confess, were a sad and bitter disappointment to me. (p. 127)

町並を見渡しても、彼が本を読んでイギリスと結びつけて考えていた古い寺院や公爵も伯爵も何も見当たらないので、「これが英国なのか」と思わず問いかけてしまう。

And this is England ?

But where are the old abbeys, and the York Minsters, and the lord mayors, and coronations, and the May-poles, and fox-hunters, and Derby races, and the dukes and duchesses, and the Count d'Orsays, which, from all my reading, I had been in the habit of associating with England ? Not the most distant glimpse of them was to be seen. (p. 133)

町を彷徨して目にするものは、貴族や貴族の建物とはほど遠いむさ苦しさであり、貧困である。彼は「むさ苦しい男や女や子供たちの群」(p. 201)の間を通り、ゆく先々に待っている乞食を前に「貧困、貧困、ほとんど無限に果てしない展望を見せる貧困」(p. 201)とつぶやく。また、町の路地が悪徳と犯罪で腐敗する様は他に類をみない程である。

The pestilent lanes and alleys which, in their vocabulary, go by the names of Rotten-row, Gibraltar-place, and Booble-alley, are putrid with vice and crime; to which, perhaps, the round globe does not furnish a parallel. (p. 191)

こうしたイギリスに対する幻滅感と共に味わうのが、父が不在であるという実感である。それは、彼が家を出る時に持ってきた父の緑色のモロッコ革の案内書が、もはや時代遅れで役立たずだとわかった時のことである。「リバプールの誤りのない知識」(p. 152)を与えてくれるものと確信して、父の案内書を頼りに父が泊まった Riddough's Hotel を探すが、ホテルは半世紀近く時の経過を経た今では、もはや見当たらない。この「動く世界」(p. 157)では父を導いたものは息子を導かないと、次のように述べられている。

It was a sad, a solemn, and a most melancholy thought. The book on which I had so much relied; the book in the old morocco cover; the book with the cocked-hat corners; the book full of fine old family associations; the book with seventeen plates, executed in the highest style of art; this precious book was next to useless. Yes, the thing that had guided the father, could not guide the son. (p. 157)

そして、“he had gone whither no son's search could find him in this world.” (p. 155) と言う時、父親が不在であるという実感は最も強くなる。R. W. B. Lewis も “This is the moment when Melville's hero realizes that he is an orphan”¹⁴⁾ と述べている。John Samson は父の案内書と現実とのずれを商業の発達にあるとする。リバプールは 19 世紀前半に大きな商業的發展を遂げた。1835 年に Municipal Reform Act が通過し、税関やドックが次々と建てられ、古い貴族的封建制は失せていった。Redburn の父が古い貴族的ヨーロッパを象徴するならば、彼の栄枯盛衰、存在と不在はこうした社会変化を反映すると言えるのである。

The decline and fall of Redburn's father, who may symbolize the patrimonial social system of feudalism, reflects these changes.¹⁵⁾

父の栄光は英国の過去と結びついていたのである。実際のイギリスへの旅によって Redburn が抱いていた英国像が崩れると共に、父親不在を認識したのも

当然である。

父の存在と不在は社会変化だけでなく神や信仰の問題とも関係する。イギリス旅行によって彼は父を喪失すると共に、信仰まで喪失してしまうのである。イギリスへ到着する前の彼は、日曜日には教会へ行き、日曜学校的道徳を信じている。水夫が悪態をつくのを見て彼らは日曜学校へ行かなかったのだらうと軽蔑の念を抱く。

At that time I did not know what to make of these sailors ; but this much I thought, that when they were boys, they could never have gone to the Sunday School ; for they swore so, it made my ears tingle, and used words that I never could hear without a dreadful loathing. (p. 34)

こうした Redburn にとって、あこがれのまゝであり完全無欠な父は神にも等しい。父は「無限に清く偉大」であると次のように描かれている。

But then I remembered, how many times my own father had said he had crossed the ocean ; and I had never dreamed of such a thing as doubting him ; for I always thought him a marvelous being, infinitely purer and greater than I was, who could not by any possibility do wrong, or say an untruth. (p. 34)

John Bernstein はこの箇所コメントをつけ、Redburn のこの世の父の探求は天の父の探求と重なりを見せると次のように述べている。

This description of a being who is “infinitely purer and greater” and who can never make a mistake certainly has connotations of the Almighty. Redburn’s pursuit for his earthly father has become interwoven with a search for a heavenly father.¹⁶⁾

また別の箇所で Bernstein は「Redburn の追い求める父は神である」(“the father Redburn pursues is God”)¹⁷⁾と極めて強い調子で述べている。なるほど Redburn にとって絶対的存在であった父のゆかりの地ヨーロッパを訪問することは、神の探求にも等しいのであろうか、テキストにおいても、この旅は「子としての巡礼」(“a filial pilgrimage”)(p. 154)であると述べられている。父と神を重ね合わせる Bernstein は父の案内書を聖書であると考へ、父の案内書が役に立たないと判明した時点を Redburn が信仰を喪失する時とみている。¹⁸⁾

しかし、テキストをよく読むと、父の案内書がほとんど役に立たないことが判明した後、次のような文章が目に入る。

But there is one Holy Guide-Book, Wellingborough, that will never lead you astray, if you but follow it right ; and some noble monuments that remain, though the pyramids crumble. (p. 157)

ここでいう“Holy Guide-Book”こそ聖書であり、それは父の案内書が時代遅れであると判った後も、主人公の心の拠り所として残っているのである。すなわち、神は父を凌いだといえるのである。Redburn はまた別の箇所で「神はすべての人の真の父であり、神の子はすべて神の保護の範囲内にあることを我々は感じ知っている」(p. 140) と述べ、天上の父が地上の父を凌駕することを認めている。しかし、そうした Redburn の信仰も Launcelott's Hey での場面に前に失せてしまうのである。Redburn が Launcelott's Hey で見たものは餓死寸前の一人の女と二人の娘の姿である。あまりにも惨めでむごい母娘の姿を前に彼は最後の拠り所である聖書にむかってこう叫ぶ。“Tell me, oh Bible, that story of Lazarus again, that I may find comfort in my heart for the poor and forlorn” (p. 184). しかし聖書は彼の心をなぐさめてくれはしない。何の救いも得られないまま母娘は死に、死体は始末される。絶望のあまり、“Ah! What are our creeds, and how do we hope to be saved?” (p. 184) と彼はキリスト教信仰に対する大きな不信の念を表す疑問を投げかけるのである。

以上のように父と神は同等ではないにしろ大きな重なりを見せながら物語の主要テーマとなっているのである。父はヨーロッパや紳士性、そして神の象徴であり、主人公の中でそれらの価値が崩壊すると共に、彼は父が不在であることを実感する。そして、旧世界イギリスに対する幻滅と共に芽生えるのが新世界アメリカに住むアメリカ人としての自覚である。Bercovitch のいう「アメリカの息子」としての自覚がどこまで物語後半において主人公に出来たかみてみよう。

旧世界に対するロマンティックな夢が崩壊し、あこがれていた父のイメージが崩れると共に、彼の目はアメリカへと向けられる。そこは、すべての人間が

「父も母もなく」(p. 169), 遺産を平等に分かち合う民主主義と平等主義の国であり, アダムの子が再び戻りくるエデンの園にも匹敵する理想郷として描かれている。

We are the heirs of all time, and with all nations we divide our inheritance. On this Western Hemisphere all tribes and people are forming into one federated whole; and there is a future which shall see the estranged children of Adam restored as to the old hearth-stone in Eden.

The other world beyond this, which was longed for by the devout before Columbus' time, was found in the New; and the deep-sea-lead, that first struck these soundings, brought up the soil of Earth's Paradise. Not a Paradise then, or now; but to be made so, at God's good pleasure, and in the fullness and mellowness of time. (p. 169)

なるほど, イギリスの貧困を前に「ニューヨークではそんなものは見たことがない」(p. 201)と述べ, 乞食に関しても次のように述べられている。

For *there*, such a being as a native beggar is almost unknown; and to be a born American citizen seems a guarantee against pauperism; and this, perhaps, springs from the virtue of a vote. (p. 202)

しかし, このアメリカ人としての誇りと優越感はすぐに揺れ動く。理想主義的かつ国粋主義的アメリカ像は現実にそぐわないのである。「貧困と乞食」を除いてはニューヨークもリバプールも同じようなものだとして次のように続けて述べられている。

...and barring the poverty and beggary, Liverpool, away from the docks, was very much such a place as New York. There were the same sort of streets pretty much; the same rows of houses with stone steps; the same kind of sidewalks and curbs; and the same elbowing, heartless-looking crowd as ever. (p. 202)

またリバプールの貧民街に黒人がおらず, 自由の国アメリカよりもイギリスにおいて黒人が誇りを持って歩いているのに気づき, アメリカは独立宣言の精神を他国に委ねてしまったと遺憾の気持ちすら表明する。

...at first I was surprised that a colored man should be treated as he is in this town; but a little reflection showed that, after all, it was but

recognizing his claims to humanity and normal equality; so that, in some things, we Americans leave to other countries the carrying out of the principle that stands at the head of our Declaration of Independence. (p. 202)

しかし、理想郷としてのアメリカ像は現実にそぐわないとしても、イギリスで味わったこの世の「冷たい慈悲」を考えながら、アメリカではせめても訪問客には「ディナー」と「ベッド」でもてなそうと思う。

“Stranger! If you ever visit America, just call at our house, and you'll always find there a dinner and a bed. Don't fail.”

I then walked on toward Liverpool, full of sad thoughts concerning the cold charities of the world, ... (pp. 212-213)

そして誰よりもイギリスで知り合った友人 Harry Bolton をアメリカ帰国の際には、国の名誉のためにも私事を後にしてもてなそうと決心するのである。

But inefficient, as a benefactor, as I certainly was; still, being an American, and returning to my home; even as he was a stranger, and hurrying from his; therefore, I stood toward him in the attitude of the prospective doer of the honors of my country; I accounted him the nation's guest. Hence, I esteemed it more befitting, that I should rather talk with him, than he with me: that *his* prospects and plans should engage our attention, in preference to my own. (p. 279)

しかし実際は、Redburn はアメリカ帰国後、Harry を見捨ててそそくさと家へ帰ってしまうのである。「ニューヨークで友もなく金もない外国人」(p. 311)として Harry はやがて捕鯨船に乗り込み死んでしまう。

ハイランダー号での航海の後10年を経過して語り手 Redburn の心にあるものは Harry を助けてやれなかったことに対する無念の気持ちであり、「アメリカの息子」としての自覚と自立の欠如の確認であろうか。物語冒頭のガラスの船の描写で、「私が自分の足で立つまでは、壊れた船首像を立ててやろうとは思わない」は、そのまま Redburn の精神的状況を表しているようである。Redburn はイギリスへの航海において旧世界的価値に幻滅すると同時に、旧世界を象徴する父の不在を確認した。そして、新世界へ理想を向ける一方、自立出来

ないままでいるのである。以上のように、Redburn は一つの航海記でありながら、父の存在と不在、そして子との関係を軸として意味づけられた作品といえるのである。

注

- 1) Herman Melville, *Redburn : His First Voyage Being the Sailor-boy Confessions and Reminiscences of the Son-of-a-Gentleman, in the Merchant Service, The Northwestern Newberry Edition* (Evanston and Chicago : Northwestern Press and The Newberry Library, 1969), p. 3. 以下、*Redburn* からの引用はすべてこの版からであり、括弧内に頁数を示す。
- 2) Hershel Parker, “Historical Note” to *Redburn, The Northwestern-Newberry Edition*, p. 325.
- 3) *Ibid.*, p. 324.
- 4) William Gilman, *Melville’s Early Life and Redburn* (New York : New York University Press, 1951), p. 204.
- 5) R. W. B. Lewis, *The American Adam : Innocence, Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century* (Chicago : The University of Chicago Press, 1955), p. 138.
- 6) *Ibid.*, p. 138.
- 7) Cleanth Brooks, R. W. B. Lewis, Robert Penn Warren, *American Literature : The Makers and the Making* (New York : St. Martin’s Press, 1973), Volume I, p. 812.
- 8) R. W. B. Lewis, *op. cit.*, p. 137.
- 9) Hershel Parker, *op. cit.*, p. 325.
- 10) John Samson, *White Lies : Melville’s Narratives of Facts* (Ithaca : Cornell University Press, 1989), pp. 93-94.
- 11) Sacvan Bercovitch, “Melville’s Search for National Identity: Son and Father in *Redburn, Pierre and Billy Budd*,” *College Language Association Journal* 10 (March, 1967), p. 217.
- 12) *Ibid.*, p. 220.
- 13) Herman Melville, *Pierre ; or, The Ambiguities, The Northwestern-Newberry Edition*, p. 29.
- 14) R. W. B. Lewis, *op. cit.*, p. 137.

- 15) John Samson, *op. cit.*, p. 108.
- 16) John Bernstein, *Pacifism and Rebellion in the Writings of Herman Melville* (The Hague: Mouton & Co., 1964), p. 65.
- 17) *Ibid.*, p. 58.
- 18) *Ibid.*, pp. 66-67.